

2030年夏季東北ユースオリンピック招致に向けた提言

立教大学 松尾ゼミ B

○加茂 祐樹 廣木隆志 二口明香里

1. 緒言

今年 2012 年はロンドンオリンピックで世界中が盛り上がった。翻って、2 年前の 2010 年、ユース世代のオリンピック・ユースオリンピックが第 1 回大会を迎えた。

ユースオリンピックはオリンピックと同様、スポーツの持つ力や可能性を伝えられる一つの重要な契機であり、ユース世代を対象としていることから青少年への教育効果が期待できる。そこで、ユースオリンピックを日本、中でも若い力が復興のカギを握る東北に招致したい。そして、今年生まれた子どもたちが成長し、18 歳になった 2030 年の夏季東北ユースオリンピックで選手としてチームを引っ張り、スタッフとして大会運営をしていけるよう、段階的に子どもたちへのサポートをしていきたい。

本提案では、東日本大震災からの復興にスポーツビジョンをリンクさせ、東北をスポーツの持つ力、子どもたちの持つ力で再興するためにユースオリンピック招致の必要性を提言したい。

2. ユースオリンピックに関して

2.1 ユースオリンピックとは (Youth Olympic Games。以下、YOG。)

14 歳から 18 歳までのアスリートを対象とした国際総合競技大会。IOC のジャック・ロゲ会長が 2007 年に提案した。

若者のスポーツ離れを食い止めることとドーピングの撲滅が開催の経緯であり、「ユースオリンピック競技大会の理想は、スポーツ・文化・教育が一体となったイベントを実現することある。文化・教育プログラム (CEP ; Culture and Education Program) は、競技会と同等の重要な要素である。」(JOC) と指摘している。

- CEP の特徴 : 4 つのコンセプト (学び、貢献、交流、称賛), 5 つの教育テーマ (オリピズム、能力の開発、幸福で健康的なライフスタイル、社会的責任、豊かな表現)
- CEP の具体的な内容 : 第 1 回夏季シンガポール大会のアイランドアドベンチャー (チームを作り、体力チャレンジ、チームワーク、相互の信頼), 第 2 回冬季インスブルック大会の持続可能性プロジェクト (エネルギー開発、環境保護、冬山の危険性)

2.2 ユースオリンピックが抱える課題

日本での認知度の低さ, CEP の一時性, 本質的な理解に至らない

⇒ “東北でユースオリンピックを開催してはどうだろうか”

3. 2030年夏季東北ユースオリンピック招致策の理念とプロセス

3.1 なぜユースオリンピックか

- 世界の未来を担う若者（Youth）にスポーツの持つ力、可能性を感じ取ってもらう。
- スポーツというソフトだけで人々が繋がり合う感覚から人間的成長だけでなく、文化交流を通して“他者理解の心”が芽生え、世界平和につながる。
- 東日本大震災からの復興のモデルを「子ども」の成長とともに達成できる。
- ※子ども＝未来（「身体的成長」、「精神（人間）的成長」が「震災からの復興」のイメージとリンクする）

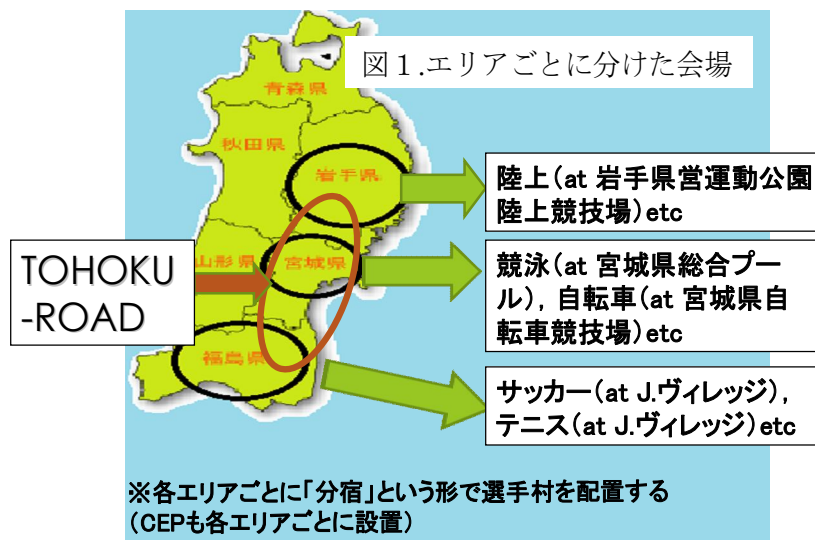
3.2 なぜ2030年か

- 東日本大震災から1年後の2012年に生まれた子どもが2030年の大会時、18歳になり、チームを引っ張る立場になる。
- 選手、サポートメンバーを含め、ユースオリンピックにおいて中心的な役割を担う年齢になった彼（彼女）らが18年間を通して各々の体験、経験から人間力の高い人間になることができる。
- 長期間の招致活動や段階的なサポートが日本のスポーツに対する意識を変えていく（偏った競技スポーツ観からスポーツを通じた人間教育へ）。

3.3 なぜ東北か

- 東日本大震災からの復興の一つのゴール（指標）になる。
- 開催に向けたインフラ整備によって復興のスピードが加速する。
- “平和”“環境”について改めて世界が考えるきっかけとなりうる。
- メディアに取り上げられることで知名度が上がり、ユースオリンピック出場を夢見る子どもが増える。
- ユースオリンピックの招致活動としての国際・国内交流を通じて、他者の発見や新たな自分の気づきから被災者の「心の復興」につながる。

3.4 東北三県のスポーツビジョンとユースオリンピック



- 東日本大震災の被害が大きかった3県（岩手県、宮城県、福島県）で開催する。
- 青森県、秋田県、山形県は物資の援助やボランティアなど、各種サポートを行う。
- 三県を行き来できる道路「TOHOKU-ROAD」の建設。

※ユースオリンピック（スポーツ）の力で被災地が再興し、よみがえる姿を創出する。

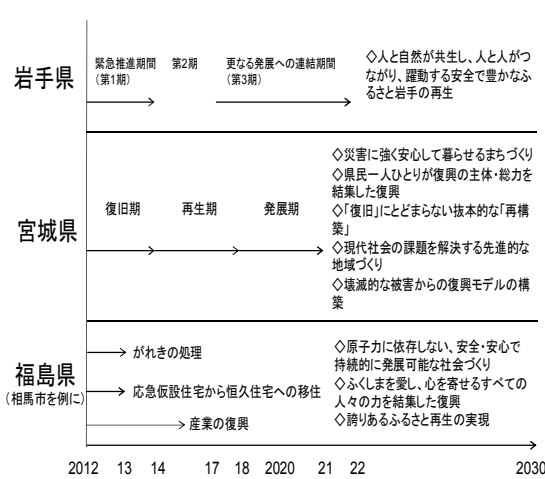


図2. 東北三県の復興計画

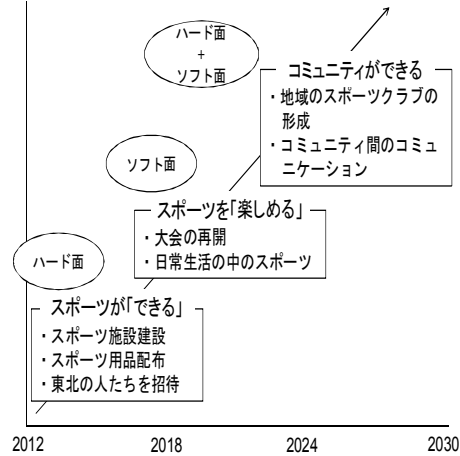


図3. 2030年までのスポーツビジョン

4. 「ユースオリンピックサポーター発掘・支援プロジェクト（YOSプロジェクト）」

4.1 計画的にYOGを招致する

各都市でのユースオリンピック視察や国民体育大会でのサポート、また、PR といった国内大会誘致、日独交流や日韓交流などスポーツ国際交流プログラムといった国際大会誘致、東北地方の役所に話をかけあうなどの教育プログラムの招致など。

4.2 段階的に子どもたちをサポートする（「0歳からオリンピックリーダーを育てる」）

- (1) 幼児期は保護者への支援を中心に（2012～2016年）
 - ・幼児期からできるエクササイズなどのプログラム作成
 - ・保護者向けのスポーツ教室
- (2) 幼稚園・保育園期に多くの運動体験（2017～2019年）
 - ・幼稚園、保育園にアスリートを派遣し、共にスポーツをするプログラムを継続的に行う（継続的に行うことが大事であるため東北のアスリートを中心に）
- (3) 2018年冬季ユースオリンピック（平昌大会）観戦に東北の子

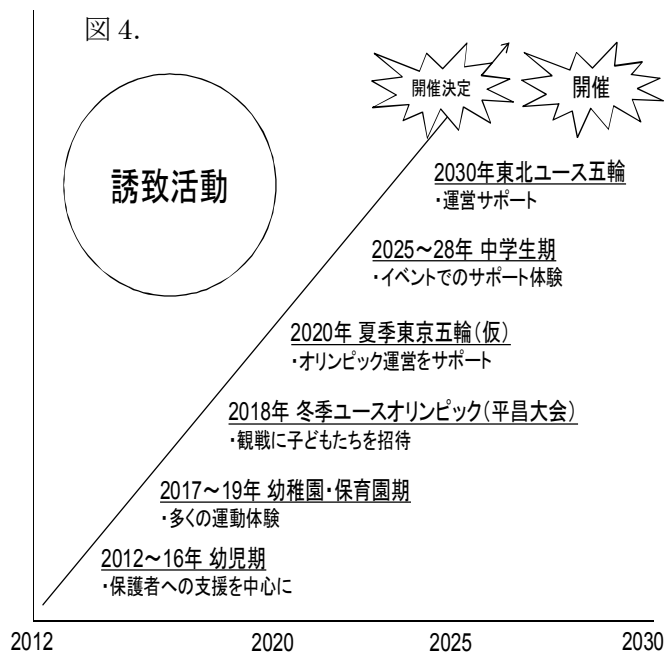


図4.

どもたちを招待

(4) 小学生期にサポート・競技会経験 (2019～2025 年)

(5) 2020 年夏季東京オリンピック (仮)

開会式でマスゲーム, マスコットキャラクターの考案, 絵の展示, 東京五輪観戦ツアー, ボランティア活動 (例. ゴミ拾い)

(6) 中学生期にイベントでのサポート体験 (2025～2028 年)

(7) 東北大会 (2030 年)

オリンピック教育プログラムリーダー, 開会式の運営サポート, 聖火ランナー (「TOHOKU-ROAD」を走る)

※18 歳になった子どもたちが選手、サポーターとしてオリンピックを創るリーダーに

5. 大会後の展望

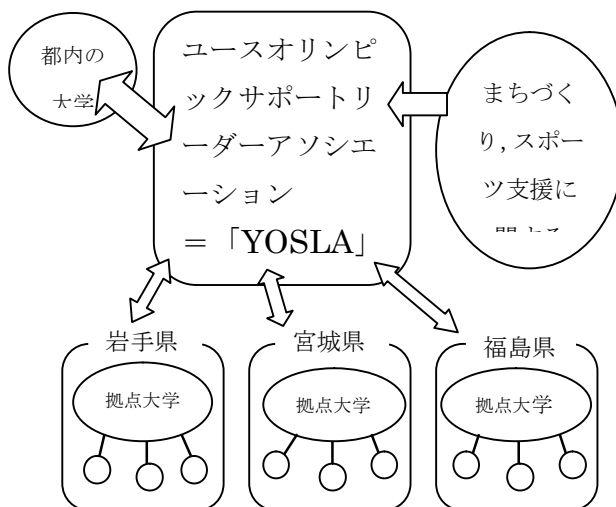
スポーツ、オリンピックの持つ力 (物理的復興・精神的回復) を後世に伝える場の提供や施設の維持、ユースオリンピックの有用性 (必要性) を問うことが必要になる。

6. 「ユースオリンピックサポーター発掘・支援プロジェクト (YOS プロジェクト)」の組織化と運営—今動き出そう！

都内の大学のボランティアサークルやボランティア活動を行っている人たち、NPO 法人、東北三県の各拠点大学の人たちが協力して東北三県の連携をはかり、活動拠点となる。

→「ユースオリンピックサポーターリーダーアソシエーション (YOSLA)」

…「ユースオリンピックサポーター発掘・支援プロジェクト (YOS プロジェクト)」にあたる。



<参考 URL>

・公益財団法人日本オリンピック委員会

http://www.joc.or.jp/games/youth_olympic/index.html (最終アクセス 2012/09/7)

・国土技術研究センター

http://www.jice.or.jp/sinsai/sinsai_plan.php?dir=5,6,7 (最終アクセス 2012/09/7)

・Nikkei BP net

http://www.nikkeibp.co.jp/style/biz/abc/newword/080902_64th/

(最終アクセス 2012/09/7)